

若き青年時代を四年間シベリアにて

人生を大きく変えた抑留生活記

高知県 安岡 精治

昭和二十年十月二十九日、海林元兵器廠兵舎をソ連軍兵士に引率され、混成された部隊になった私たちの約千百人の大隊は、池川少佐、(北満の歩兵独立大隊の大隊長)の指揮下に、シベリアに送られることになった。私の所属していた部隊の人の顔はなく、知らない部隊の人たちであった。みな無言のまま、列車に乗る駅までの行軍が始まった。

駅に着いている貨車の数は非常にたくさんであった。私は大隊の最後方の八中隊であり、大場少尉の小隊で、第六班森口曹長の班であり、伍長一人と私兵長一人、他は中年の召集兵が大部分であり、若き兵士が少なかった。

馬の輸送車のようにであり、一貨車に約五十人ぐらいで

あった。貨車は緩芬河を通過、国境を越えた。いよいよシベリアに入ソすることとなる。貨車の中で一番先に私のよき話し相手となったのが、シベリア生活の中で忘れられないことのできない一等兵、牧野氏である。牧野一等兵は、現役で名古屋の部隊に入隊、昭和二十年四月、ハルピンの鉄道隊にいたという。

貨車の中の生活は夜昼の区別がないありさまであり、食事はソ連兵士が窓より旧日本軍の(カンパン)の袋を投げ入れてくれる程度であり、みなで仲よく分けて、捕虜となった身をお互いにかばい合う状態であった。貨車に乗る日より十三日くらいたった。突然貨車は止まった。目的地であった。収容所入りの駅である。ソ連領土シベリアのタイセット駅である。

次々と貨車より降りる私たちの捕虜部隊は、みなが驚いたのは、真っ白な雪化粧の街であった。次々と大隊は雪の中を行軍し始めた。ソ連軍兵士が我々に小さな黒パンを一人一人に十個ずつ渡してくれた。私は牧野一等兵とともに、森口曹長にすぐ後について収容所入りすることとなった。

行軍四日目に入所する。タイセット地区七地区第九收容所であった。この行軍で、すでに雪の中で病気になる、行軍途中でソ連軍用の馬そりに乗ってタイセットに送られた戦友が百数十人になっていると森口曹長が私に言った。私たちの班には一人もそれがなかったのだ。

だが、体の調子はみな顔色もよくなく、寒さと空腹のため、收容所に入るとともに、生きている気持ちがいなかった。ちょうど入所が夕方であったので、ソ連軍兵士が見回りにきて、小隊長に通訳を連れていろいろ説明をして話をしていた。我々は黒パンの配給を受けて夜を過ごすことになった。

私たち兵舎はシベリア松の森の方に近い兵舎で、第九收容所第十一兵舎で、約百名がともにシベリア捕虜生活の第一歩のときとなった。兵舎は二段ベッドであり、上下下になっての一人一人がくっついて寝るくらいであった。

毛布一枚が支給されたときに小隊長室に班長が集合された。一時間くらいたって私は班長室と呼ばれた。ソ連軍よりの命令により、明日よりの作業は、シベリア松の

伐採作業であり、食事は当番をこしらえて、ソ連軍兵士の兵舎食堂より食事を受けとること、小隊長当番として牧野一等兵をつける、班長代理として作業をすること、であった。

班に帰って、以上の整理をするというのは一切をお前、私兵長が責任をもって班員に伝え、食事当番の氏名を報告してこいとのことで、私はすぐ班に帰り、五十人の班員にこのことを伝え、食事当番として一番若い班員八木一等兵を任命、何時刻であるかもわからず、自分の寢床に入った。

翌朝は起床は、ソ連軍の機関銃の音によって起床した。直ちに小隊の点呼である。ソ連軍兵士二人が銃をかまえて点呼である。終わると直ちに食事が配られることとなった。当番の八木一等兵が持ってきたのは黒いパンが一切れ百グラムぐらいいのと、飯盒のふた、すりきりの満州コーリヤンの皮つきの入った赤色スープ一杯である。昼食はパン一切れとコーリヤンにぎりめしが飯盒に三分の一ぐらいいであった。夕食はまた朝食と全く同様であった。

朝食を終わり、朝六時ごろだと思っている。森口班長の命により、班員全員整列し、作業道具を渡された。それは二人で伐採する鋸であった。初めて見る鋸（ピラ）であった。私と牧野一等兵が二人一組になった。ソ軍の兵士に引率され、現場へ向かった。徒歩で約一時間くらいで、深い雪の中、シベリア松の大木の森についた。

大木の松の木の下の雪をスコップで掘り、牧野一等兵と二人で作業についたが、力はなく、鋸で木の中ごろまで切ると、昼となった。他の班員も一本の大木を切るには一日かかると話していた。シベリアの寒さは日本軍の防寒服では耐えられないほど寒い。みなでグループを組んで雪をのけ、小さな穴をこしらえ、松の木の折れた枝を集めて火をつけたりして寒さをしのいだ。この日の温度は零下二十五度であった。

私たちにとってはほとんどの班員が、こんな伐採作業の経験者はいなかった。夕方になって一本の大木を切る事が精いっぱいであった。一本を切っていない組をみると、半分以上が切っていないのである。作業終わりの銃声が聞こえた。直ちに集合し点呼を受けた。

ソ連軍兵士の点呼は何回も行なわれた。私は夜食を終わると班長室に呼ばれた。ソ連軍収容所長は、日本人捕虜は仕事をしない。こんなことでは私の身上関係にも上官に報告することができないので、明日より必ず一日一本の木を切り始末することを命ずるとのことであった。ノルマの始まりであった。

弱った身体、粗末な食事、寒さ、経験のない作業、これがもとで気狂いの原因ともなり、病気（なんとも言えない）になり、約一ヶ月に班員の半分はノルマの達成はできず、私自身も病人のように体が震えることもたびたびだった。もう食事と寝ることがどんな人間には必要であるかがはっきりとわかった。

このころより体力が弱っているのに、もう一つ悪いことが起きたのである。シラミの発生である。兵舎でドラム缶で雪をわかし湯をつくり体をふくだけでは、洗濯のする班員はだれもおらず、班員全員シラミのいないものはなかった。私は十二月中旬ごろだった。

ちょうどソ連軍の通訳が作業を見にきていたので、なんとカシラミのことを知らずべく考えた。牧野一等兵に

話すと、私が防寒具を脱いで見せると言ったので、八木一等兵に言って火を大きくたいておけと言って通訳を連れてきた。通訳はこのシラミを見て驚き、直ちに森口班長を呼んで、このことを收容所長に報告するので、今夜通達することであった。

その夜、班長より、明日作業を休み、ソ連軍兵舎の浴場にて各兵舎順番にソ連軍兵士の下着を支給し、シラミを今までの下着全部を熱湯で殺すとのことになった。このことがソ連軍の日本軍捕虜に浴場をつくることになり、一週間に一回バーニヤ（浴場）にて体を温め「あか」をおとすことになる。日本流の風呂ではなく、ロシア風の浴場である。大きな室に熱風をおこし、布切れで体をこすのだ。骨と皮になった班員、私もそのとおりである。このことは他の兵舎よりもソ連軍に願っていたことがわかった。

こうしている毎日が、昭和二十一年二月ごろに、栄養失調の兵士、気が狂って夜間雪の中で死亡している兵士が続出し始めたのである。第九收容所にソ連軍軍医が来た。全員が浴場にて軍医の診断を受けることになった。

特にひどい栄養失調の者はタイセット捕虜病院に入院が始まった。第一回の入院者、私の班より十一人出た。年寄りの召集兵が主であった。

三月中旬、私たちの班と第五班と合併になり、班員は八十人となった。森口班は相変わらず伐採作業が続き、雪の中の作業には少からずなれてきた。毎日毎夜の話は日本の故郷の食べ物のことのみで、日本に帰ることはいつになるか、私たちにはわからず、希望もなくなり、もう腹いっぱい食事をしたことのみが望みであった。

第二回目の軍医の診断があり、私たちも夜の分になり、また班員より五人が入院した。今になって考えても、このときは捕虜になった軍人は考える力があったのかと思うと、その日その日が生きていることも忘れていくこともあったと思う。

昭和二十一年の七月になって、班長より呼び出しがあったので、会いに行った。兵舎のうちの森の中に少しの広場があった。その場所に穴を掘るとのことにて、翌日班員八人とスコップを持って大きな穴を掘った。第一班の班員十六人が荷物を持って馬車が続いていた。冬季

に亡くなった戦友七十五人の死体であった。私たちに埋葬せよとのことで、私はなんと叫ぶに悲しい気分になり、涙が出た。異国の土地で死んでいく戦友に対し心より冥福を祈った。班員たちも顔色は土色になり、涙を流していた。

その夜、兵舎全体が悲しみが無言の中によくわかった。やがては自分たちもそうなるぞと、老いている一等兵がわめき始めた。私は彼の肩をたたいてなだめた。彼は私にだきつき、日本の子供のことを考えると、早く日本に帰りたいと言ったことを忘れることができない。

八月の夏は森の中はブヨが群れをなし、作業には顔に防面具をつけ、ノルマ達成のため夜おそくまで伐採をやった。シベリアの北部は夏は夜がないのだと思うほど明るい。

思わぬ大事件が起きた。第一班の小隊長が、作業場で兵士数人になぐられ、大負傷をしたので、牧野一等兵が私の班員を三人すぐかしてほしいとの報告に来た。私と牧野、八木三人が現場に行ってみると、血だらけの小隊長を囲んで、十五人ぐらいの兵士が「死ね死ね」とわめ

いていた。

上等兵が一人いたので、事情を聞くと「我々は捕虜だ。もう昔のような軍隊ではない。同じように作業するのだ。ソ連軍に顔を売るために「ノルマ以上の仕事をしろ」といつもうるさく命令するので、兵士が怒ってやっ」と言っていて私の顔をにらんだ。私は兵長であったので、私に言っていると感じ、何とも言えない気持ちになった。

すぐソ連軍の若い下士官と兵三人が現場にきて、動けなくなった少尉を私たちに兵舎に運ぶよう命じた。八木一等兵が背中に負って、私たちが足を支えて兵舎に入れた。ソ連軍の下士官は私たちに作業に帰るよう命じた。作業を終わって兵舎に帰ると、山本上等兵（秋田県出身）が私に班長室に來いとの伝言で、室へ行くと、班長が、大場小隊長が収容所長に呼ばれて行った。どうも将校は全部別収容所に連れていかれるらしい。今日の出来事で各小隊は話し合いでいろいろと今後の一切のことをきめることになるらしいと話した。

私は班に帰って牧野一等兵にこのことを話した。彼は

小隊長の当番をしながら私たちと同様に作業をしているので、苦勞が多かった。体も小さくなり、やせ細っている。彼が話すには、昨夜、各小隊長が大場少尉の部屋で、将校は別收容所に行くと、ソ連軍よりの命令があったらしい話をしていたとのこと、私は一体これは大事になる、変わった体制になると直感した。

翌日、大場少尉は小隊全員に別れを告げ、兵舎を出て行った。私たちは朝食をとり、作業に行く。仕事を終わって兵舎に帰ると、班長が全員集合を命じた。ソ連軍の将校と通訳が来て、小隊全員の集合となった。「話は」今日より軍隊の階級章をみな集めることと、今後は兵舎ごとに兵舎長はソ連軍にて命ずる、また食事は黒パンと羊肉入りのスープとする、と言って帰った。

翌日、軍医の診断があり、牧野一等兵は栄養失調となり、入院することとなり、私と牧野君は再会するときもあるといつて入院した。この診断で兵舎よりの入院は二百人を超した。食事は少しよくなったが、作業は厳しく、夏は去り、冬の季節を迎えた。ソ連軍の命令により、小隊長は森口曹長に変わっていた。

以下、階級がなくなったので、姓名だけで人物を書かせてもらう。

昭和二十一年十月に入り、私は旧満州沫江飛行場の戦闘に、後頭部に戦車弾の破片を受けた場所が化膿して、タイセット捕虜病院に入院することとなり、ソ連軍の軍医が他の兵舎の負傷者（作業中）十五人を病院に運んでくれた。私のこれからの抑留生活を大きく変えるときとなった。

雪の中の捕虜病院は粗末なもので、收容所の兵舎と変わりなく、看護婦のかわりに旧日本軍の衛生兵が数人おり、ソ連軍女医（中年）と日本軍軍医新田大尉（京都府出身）が診断や手術を行っていた。私は後頭部の化膿か所の手術を受け、約一カ月くらいを病院で過ごした。十一月に入り、弱兵として病院の浴場の薪割りを命ぜられた。ここで急性肺炎にて入院し、弱兵となった萩野伍長（姫路市出身、現在市役所を退職、姫路市におり昭和六十三年に再会する）と二人が作業をした。

昭和二十二年四月ころになり、萩野君はタイセット第五收容所に、私は第十二農場に行くこととなり、再度の

収容所生活に入ることとなった。ソ連軍下士官に連れられた私たち六人の弱兵は第十二農場に着いた。余り広くない農場であるが、ソ連の民間農民四十人ぐらいと、日本軍捕虜百人ぐらい、他にソ連軍の下士官兵士二十人ぐらいがいた。

馬鈴薯のみをつくる作業である。だが、雪はまだ解けず、貯蔵してある袋詰め馬鈴薯を馬そりにて、日本人捕虜収容所に輸送する班に回った。ソ連軍下士官とともに馬の世話をするのと、運搬中はそりの上の薯袋に坐って、袋が落ちないように注意することが作業であった。この農場の食事は黒パンは約百グラムだが、馬鈴薯の配給は食べ放題で、生いもを食べたり、焼いたりして食した。次の重労働作業所への体力づくりの農場である。

入所翌日、下士官とともにタイセット特別収容所にいもの運搬に行くことになり、朝から荷積みを終わり、昼食を終わると、下士官と出発する。夕方は第六収容所に宿った。馬とそりを収容所の特別な倉庫に入れ、私は馬とともに寝た。翌日朝早く出発、二時間ぐらいであっ

た。私は驚いた。私が前にいた第九収容所の作業所である。森林はほとんど伐採され、所々に日本軍捕虜の伐採された木材をロシア馬にくさりをつけ、木材の運搬している戦友が多かった。

この森の中を二十分くらい走った。前方にソ連軍の兵士数名がたき火をして休んでいたところで、下士官は馬をとめ、兵士と話を始めた。私もそりより降りていると、一人の日本人捕虜が来た。私の顔を見て兵長と叫んできつてきたので、顔をよく見ると、八木一等兵である。私はこのときにこそ生きていけば必ず会えるという喜びを知った。八木君は体も丈夫になり、丸々と顔も太っていた。話をしているところへ通訳が来た。彼もびっくりしたのだ。私の顔を覚えていたのか「やすおか」マーネーキ（小さな安岡）と言った。

通訳の話によると、八木君は東北生まれで、馬を使うのには名人だ（ハラシヨラポータ）の第一人者である。と八木君の頭をたたいた。そこへソ連軍下士官が来た。通訳がロシア語でこの八木に馬鈴薯を少しやってやれと言うのだから、下士官は私に袋を指さして八木君にやれ

と命じられた。私は袋の口をあけて馬鈴薯を出す、袋半分くらいおろせと通訳に言われ、半分くらい出すと、ソ連軍下士官が手を上げたので、これでよいのだの意味と思い、袋をしめた。

また八木君が私にだきつき、涙をためた目をして「兵長、必ず元気で日本に帰るぞ」と強く私をだきしめ、私も涙が出て凍ることも忘れ、きつく八木君をだきしめた。通訳とソ連軍下士官は私たちの方を見て、二人がうなづいていた。出発である。ソ連軍下士官が乗馬したので、私も急いで袋の上に乗った。八木君を見つめ大きな声で、日本で会うぞと手を振って別れた。

約一時間くらい走ると、第九收容所と同様な收容所が見えた。これが特別收容所であった。收容所の中に入ると、ロシア人とも違う女六人が待っていて、ソ連軍下士官と私は馬鈴薯をそりよりおろし、直ちに農場に帰るこゝとなる。途中、また第五收容所で一宿して、農場に帰った。農場の戦友の話では、特別收容所は、ドイツの女スパイの收容所であると話してくれた。

農場より近くにあるこの第五收容所が私の抑留中に、

また新しき宿命を变化するところであることとは、私は夢にも知らなかった。この作業農場も、健兵になれば別收容所へ行くことになり、雪どけの昭和二十二年八月、私は農場の下士官に引率され（三人の日本兵）、第五收容所へ入所することになった。

第五收容所第三班に配属になった。班長は旧一等兵であった檜原雄一（岡山県出身）といった。入所の夜、班長にあいさつに行くと、班長は、当班は作業は鉄道の建設作業であり、五人一組の仕事で、レール運搬の作業で、ノルマは作業に行つて教えるとのことであった。

翌日より作業についた。重いレールを五人で肩に担ぎ、次々と枕木の上に置いていく仕事であり、暑い夏の作業は厳しかった。入所二日目に組員の一人である山本金市（秋田県出身）君と親しくなった。作業を終わって夜のことである。私に君は民主委員会という言葉を知っているかと問われた。私は聞いたことのないものであり、山本君に話をしてくれとたのんだ。山本君も兵長である。

彼の話によると、日本人捕虜のうちソ連軍の命によ

り、収容所全員が選挙により大隊長（委員長）宣伝部長、作業長、班長が決定される。これが第五収容所の中に民主委員会があり、ソ連軍収容所の管理下に置かれ、作業生活全部が決定され、ソ連側との交渉は民主委員会のみが行うと話してくれた。

食事は少し改められたが、満足できるものではなく、黒パン百五十グラムでスープに馬鈴薯等が入られ、バイカル湖でとれた川魚の配給もときどきあった。レール担ぎの重労働には耐え得るものではなかった。作業現場で山本君より松の木の甘皮のスープをつくってもらった。彼は北陸地方では、米がとれないときには、山本君の祖父がこの甘皮と米や麦をまぜて食べると教えられたとのことだった。また七月の終わりには水たまりのできている所には日本のならによく似た草が生えていたのをとって、岩壺を入れてスープにして食べたり、暑い夏には何とか空腹を満たした。

またこのようにして夏も終わるころだった。第五収容所鉄道枕木運搬班八十人ぐらいに大事件が起きた。それは、伐採木の切り口に生えた毒きのこをスープにして食

べた者たちが腹痛をおこし、作業の帰り道で倒れ、意識不明との連絡が委員長のところへあったとのことで、山本君外二十人ぐらいの人員を直ちに現場へ行けと班長よりの命令で、私もその組に加わり現場に行った。ソ連軍軍医や収容所長フトロフスキー大尉、通訳も来て、ソ連軍の兵士が倒れている戦友の体を調べているところだった。

私たちは何もすることもできずに、一団となって通訳の命令を待った。数十分後に三台のトラック（満州日本軍のもの）がきた。通訳が私たちに、捕虜をトラックに乗せろと流暢な日本語で命令した。ソ連軍兵士と私たち二十人はこの八十人ぐらいの体をトラックに乗せて収容所に帰る途中、思わぬことが私に起きた。通訳が私に、満州はどこにいたのかと話しかけてきた。私はチチハルだと言った。「ハルビン」を知っているかと聞いたので、知っていると言うと、収容所に帰ったら委員長に言っておくから、二人で通訳室に来いと言って別れた。

収容所に帰って夕食を終わると、委員長が班に来て、通訳と話をした者はだれだと言うので、私は委員長のそ

ばに行つた。委員長は通訳室と一緒に行くのだと私に言い、二人でソ連軍通訳室に行く。ソ連軍の兵舎は我々の兵舎と違って個室になっており、通訳室は収容所長のすぐ横にあった。ここで私は驚くことのみが起つた。通訳室で通訳は私に日本語で、お前の満州での部隊はと言つたので、チチハルの第九航空補給廠であると言つたと、お前の部隊は航空燃料をハルピン駅にいつも運搬していただろうと問うた。私は白城子の通信教育隊修事後、本隊に梯隊渡航空燃料班の横井兵長（大坂市出身）とともにハルピンの平房飛行場に燃料輸送をしたことを委しく話をした。

通訳は委員長に帰れと命じた。私ともつと話をしたいと言つた。委員長が帰ると、通訳は私に言つた。通訳は白系ロシア人で、満州に逃げ、満州ハルピンにて多くのロシア人と満州鉄道にて長い間働いたロシア人の父母を持ち、その子として生まれ、ハルピンにて成長して、満鉄に働いていた。戦争の前は満鉄のトラックの運転手をしていた。平房飛行場に燃料を運搬していたので、お前の部隊の下士官には煙草や日本の酒等をよくもらつた。

特に名前を知っているのは奥田軍曹、横井兵長だつた。

私はその横井兵長の戦友であつたのか、横井兵長はどこへ送られたか知らないか、通訳はこの戦争で満州ハルピンに日本軍捕虜の連行にきた収容所長フトロフスキー大尉に、駅にいるのを助けられ、通訳として働くようにしてもらつた等、話をした。このとき、所長はフトロフスキーという名前で、四十八歳、息子は十九歳にしてドイツ戦線で戦死したことまで話してくれた。そして私の名前を聞き、班のことまで聞いた。

その夜は、委員長は能戸総太郎という旧上等兵で、タイセット地区捕虜政治学校出の優秀な者である。副委員長は浜名友秀という絵書きで旧兵長であり、宣伝部長は福井利秋旧一等兵であるといつて、いろいろの収容所の民主運動の筋書を見せてくれた。これがソ連軍の日本人捕虜の洗脳の実態、現在の収容所全体が第九収容所より変わっていることを知る結果となり、私にとつて考えもしなかつた在ソ四年余の生活を送ることになつた。

翌日朝食後、能戸委員長自ら私の所へ来て、今日は作業を休んで委員会に來いとのことにて、私は彼の後にて

委員会室に行った。ソ連軍兵舎の前、一棟小兵舎があり、中に入るとまず目に入ったのが、浜名氏の書いた給付きの新聞をぶら下げてあった。小さな部屋に三個のベッドがあり、能戸氏がベッドに坐るように言ったので、言うままになると、彼も坐り、私に、今朝、通訳の話によると、君は満州当時、捕虜になってからもこの通訳をよく知っておるらしい。通訳は君が気に入ったので、収容所長の馬の当番にして、今の当番と交替せよとの命令だ。明日より作業交替だ、所長大尉は非常にやさしい人で「僕は労働者の息子であり、民主運動のこともよくやったので、タイセツトの政治学校へも行けといって、僕を教育してくれた。そのおかげで委員長をやっているが、まず一番大事なことは、食事問題、作業のこと、一日も早く日本へ帰る情報をとること等、通訳を通して所長に頼むことだ」能戸君は私に話をし、馬の当番は所長が大事にしてくれるから、よくやってほしいと言って私の手をにぎった。

思わぬこととなり、私は戦友の捕虜が一日も早く日本へ帰国できるなら、なんでもやると心にきざみ、

収容所長の馬の当番を引き受け、翌日より馬小屋のベッドに移った。所長は朝六時には起床し、通訳を呼んで能戸君と打ち合わせをし、作業現場点検等、日中はほとんどおらず、私はペーチカの薪の準備、馬小屋の掃除等をし、馬のえさ等の準備、一日中、所長が帰るまで忙しかった。

食事は委員会より一般の作業員が運んでくれた。一般食である。夜は所長が黒パンのかけらを持って馬を見に来ることもたびたびあった。所長は私を「マーネンキヤスオカ」と言って頭を大きな手でさすってくれた。山本君が夜、私の所へ来て、兵舎に宣伝部ができ、本格的に共産政治の教育がされたと言って、君もこの新聞を読めと置いていくことがたびたび重なってきた。

通訳も夜は四、五日おきにきて、私に、よく勉強して委員長になるのだと、いつも口ぐせのように言った。しかし馬の当番は楽ではなかった。大きなロシア馬はなかなかおとなしくなく、夜中に暴れることもあり、私も馬のえさ等いろいろと工夫してこしらえ、ソ連軍兵舎の残飯等もとりにいき、体も疲れて困ることもたびたびで

あつた。

收容所の洗脳教育はますます激化したらしく、山本君の話によると、宣伝部員は前よりも多くなり、收容所へはタイセット地区本部よりも宣伝本隊員という日本人捕虜が大会を開き、レーニン主義といって、ソ連の革命のこと等を收容所全員を集め話をしたと言っていた。私の所へもたびたび本を浜名君や福井君が持ってきたが、私はそれを理解するほどの間もなく、馬の当番に毎日毎日が精いっぱいであつた。

通訳は日本語がよく話せるし、日本語もそこそこに書けるので、私にいろいろと難しい字を教えてくれといつて来る日もたびたびだつた。夏も終わり、雪の季節になる九月の中ごろだと思ふ。私の所へ突然通訳と收容所長が来て、收容所長が、タイセット本部へ転勤となる。通訳も一緒であり、お前もタイセット本部に連れていくとの話が通訳より出された。私はどんな仕事かと聞いたが、通訳は所長の命令だといつて何も言ってくれなかつた。

翌日所長は馬で、私と通訳は日本人運転手の車がき

て、タイセット本部に着いた。このときより私は日本帰国が最後のなることとなる。

タイセット地区の本部は市街より少し離れた所であり、日本人抑留者の状態を調査し、各收容所の調査（作業、生活物資輸送の状態、死亡者の名簿等、抑留者出身県の調査、洗脳教育の状態）、このときより帰国さす日本人抑留者の問題等が任務となつていた。私は通訳とともに各收容所を回り、ハラシヨラポータ（ノルマ以上の仕事をしてよい成績をあげた）人名の調査をなし、本部に報告する任務となつた。フトロフスキー大尉は妻と官舎に住んで本部長となつた。

翌日より通訳とともに各收容所を回り始めた。第三收容所、第四收容所、第五、第六、第七、第八、第九各收容所を一か月にかかるほど調査し、約二百五十人程度の人名を通訳は私に日本語で書かせた。私の宿舎はタイセット捕虜病院の一室で、通訳も私の隣の室で、彼は病院の事務もやつていた。

この二百五十人が早期帰国の第一団であることがわかつた。第九收容所で忘れもしない八木一郎君外十二人

がリストに載っていた。通訳の言うには、第五收容所の毒きのこを食した組や、各收容所よりの重病者は、八月初めに高砂丸（病院船）にてナホトカより舞鶴港に向かったとのことだった。

九月の終わりには、二百五十人余りの優秀労働者が続々とタイセット本部前の收容所に入り、帰国の準備が始まっていた。私は通訳に頼んで、八木一郎君に会いに行った。彼は元気な姿で私にだきついた。新しい日本軍の冬の軍服を着ていた。私には一生忘れることのない八木君との別れをここで味わった。タイセット駅より八木君の列車が走り始め、私と八木君は見えなくなるまで手を振った。

この時分より、タイセット駅には日本人抑留者の列車が走るのを、私は通訳とよく見た。私はタイセット地区の各收容所の人名、人数等を通訳が調査するたびに、日本字に書き、本部に提出するのが任務となり、昭和二十二年の冬も去り、昭和二十三年に入り、いよいよ各收容所の帰国順番をきめるソ連本部の計画書ができはじめた。昭和二十三年、二十四年と本部には計画書があると

通訳は私に話した。

フトロフスキー大尉に、通訳とともに本部に行くと、大尉のところに奥さんがきていて、私を見て、大尉に話をして聞いた。通訳に聞くと、「私は日本軍の少年兵かと言っている」と言った。私は大きな体をしている奥さんに頭を下げる、と大きな手で握手をしてくれたことを覚えていいる。

私の仕事は、これから各收容所の人員、氏名の調査票を作成し、特に死亡者の人名調査は捕虜病院にいる通訳と連絡をとり、作成するように命ぜられた。通訳が、急ぐ仕事である、しつかりやれと肩に手をかけ、たたくように笑った。

宿舎に帰ると、第五收容所の委員長であった能戸君が来ていた。彼の話によると、病院に入院者を連れて来たが、病院の入院抑留組が帰国がどんどんと進んでいるようだと聞いたが、私に現状の帰国はどんなになっているか知らないかとのことだ。私は、彼が委員長であり、收容所に帰って、抑留の戦友に、私が言ったと言って報告するだろうと感じ、私はすでに帰国した者も多くいる、

近きうちにタイセット地区の帰国が始まるので、みなに体を大事にして作業するよう伝えてほしいと話した。彼はうれしくてか、私の手を握り、吉報を待っている第九收容所は第七收容所へ変わってきたこと、約五百人ぐらいの死者が出ている、このことも私に伝えにきたと言っていて帰った。

あの千五人中五百人とは、私は亡くなったあの第九收容所の戦友に対して心より冥福を祈った。異国の雪の中で他界され、戦友の心の中はどんなであったか、第九收容所のころを思い、一日も早く帰国の情報を各收容所に知らすのが私の役目であると心より誓った。

三日くらいして通訳が来て、「君は造船所にいたと聞くが、日本の船で永徳丸という船を知らないか」と突然に言ったので驚いた。私はこのとき、タイセット地区の帰国近しと感じた。そのとおりになった。第七收容所、七百五十八人の帰国が決定したのは翌日であった。通訳が私に、直ちに七百五十八人の氏名を書くように書類を持ってきた。私は彼の書いた字はわかりにくかったが、夜も寝ずに仕上げた。

列車はすでに準備を終わっていると、通訳は朝早く私の所へ来て、書いた氏名表を私より受け取ると、足早に本部に行った。苦労とともにした戦友の帰国であるが、私には記憶のある氏名はほとんどなかった。通訳と駅に行ったが、みな列車に乗っていて、話もできなかった。タイセット地区の第一回目の帰国列車であった。

第二回目が第三收容所であった。昭和二十二年の九月はこの二つの收容所であった。昭和二十二年の冬季がきた。私は通訳とともに、本部の命によって、残った收容所の作業状態を見て、本部に報告することであった。第五收容所の作業は相変わらず鉄道建設の作業であったが、食物はよくなり、黒パンも大きく、スープも羊肉入りのもので、量も多くなっていた。洗脳教育も進んで、指導者の教育も盛んに行われていた。また煙草も支給されていた。それはソ連製の煙草で、マホルカという紙でまいて吸っていた。

通訳は私にこんなよい生活になったのは共産党のおかげであるぞと言ったが、私には余りピンとこなかった。このとき私は病院に入院していた萩野伍長のことを思い

出し、通訳と委員会へ行って聞いた。能戸委員長は人名簿を見て、萩野君は弱兵として再入院して、第一回目の病院船で帰ったはずだと聞かされた。残った五收容所の冬季の作業も、寒さになれたか、ソ連製の防寒具をつけ、元気な姿で作業をやっていた。

私と通訳は何回か各收容所を回り、本部に報告をした。昭和二十三年度の帰国の準備が六月より開始された。私は毎日日人名表の作成に追われ、通訳と二人が忙しい毎日であった。八月に入り、残りの五收容所より混成になった抑留の戦友が帰国することになり、私は本部より通訳とともに、人名表を持ってナホトカへ行くことになった。五百人を乗せた列車に乗り、十三日間でナホトカに着いた。通訳は私に、帰国する者とは絶対に話をしてはいけないと言った。ナホトカの海を見たときには、ただただ日本へ帰りたいの思いであった。

港には興安丸と書いた古い船が着いていた。通訳は私を、列車より離れてはいけないと言って、人名表を持って行った。私はこちらから見てみると、次々と乗船している戦友の姿がかすんで見えた。涙が出てしようがな

かった。悲しい思いや情けない思いやらで、なんとも考えることのできない、頭がおかしくなる思いであった。通訳が私のいる所へ来て、タイセットに帰るぞと言って列車に乗った。私は通訳が話すのがわずらわしくなり寝た。

三日目まで、余り通訳が話すので、私も氣をとり直していろいろと話を聞いた。通訳は旧満州時代の話をしたり、またソ連のスターリンのことをくわしく私に話した。タイセット本部に帰ると、通訳が葉書を持ってきたのである。日本にいる家族に出せと行って往復葉書を読んだ。私に片かなで書けとあるので、私は書いた（現在も所有している）。これはフトロフスキー大尉が私に対しての好意であったと通訳は言った。

また通訳は、人名表を持ってやってきた。四百五十人ぐらいであったと思う。彼の字は、なれてきたが、なかなかかたかなや漢字等の入りまじりであり、まとめるのが暇がかかった。昭和二十三年度第二回目の帰国である。タイセット地区とハバロフスク地区の混成帰国である。通訳と私はまた輸送責任者となり、人名表を持ち、

ハバロフスク地区の責任者ともになった。ハバロフスク地区の日本側責任者は林田という元曹長であった（熊本県出身）。

話は尽きなかった。新京の歩兵部隊で、機関銃隊であったらしく、ソ連へ入って炭鉱の作業であったが、ハバロフスク本部にきて、私と同様なことをしていると聞いた。通訳は私によい友達ができた、いくら話をしてもよいと言ってくれたが、他の帰国者とは話をさせてくれなかった。

ナホトカには永録丸と永徳丸、二隻の船が着いていた。通訳はまた人名表を持ち、林田君と私とを残して船の方へ行った。他の地区の帰国者もいたのか、港に見渡す限りの人の姿があった。私と林田君は無言でいた。彼も私と同様な気持ちであったのか、涙を流していた。帰る途中にタイセットまでの駅には帰国列車が三度くらい会った。

またタイセット本部での仕事が続いていた。タイセット地区の第三回目の帰国者は、前回同様ハバロフスク地区との混成であったが、通訳は私に、本部に残り、タイ

セット地区には第五收容所に全員が集結し、約九百人ぐらゐの抑留者がいるので、冬季の作業命令を持って第五收容所に行けと行って、第三回目の列車に乗ってナホトカへ行った。私は本部より第五收容所長あての書類をもらって、ソ軍の兵士の運転する車に乗せられ、第五收容所に行った。

相変わらず能戸委員長が作業大隊長でいた。私の仕事は作業日誌の作成であった。昭和二十三年十月に通訳も来所した。昭和二十三年の冬を第五收容所で行うことになった。食事もよく、作業する戦友も明るくなっていた。たびたび集会もあり、時には兵舎にて芸能会をやっていた。私は通訳とともに收容所長の世話をすることになった。通訳は、食事等で私は浴場の掃除や部屋のペーチカの薪割り等が役目であった。作業大隊は、製材所が建てられ、枕木の生産が主体となり、現地への運搬等の作業であった。通訳の言うとおりに毎日日誌を本部に送り、いつ帰国の命令があるかと心待ちする毎日であった。

冬も去り、昭和二十四年七月中ごろに、本部よりフト

ロフスキー大尉が収容所に来た。通訳と話をして、所長と食事していた。通訳が私に、八月には全員帰国するよりに大尉が言っていると言った。私は直ちに能戸委員長に話すと、今夜、各作業長を集め話をするので、通訳に言ってくれと言ったので、私は通訳に言うのと、よいとの返事であり、その夜、作業長会議で話をして、明日全員に発表することとなり、いよいよ帰国の準備となる。

収容所の戦友は、いよいよ日本に帰国できるぞと、みなで喜び合う姿が目につく。昭和二十四年八月十日、タ伊セット本部前の帰国者収容所に入所、翌十一月、フトロフスキー大尉自ら輸送責任者となり、通訳も同乗、ナホトカに向かう。列車はナホトカに着いた。ナホトカ港の新しき収容所に入り、船待ちとなる。

収容所で二日くらいの生活であったが、フトロフスキー大尉が私を呼んでいると通訳が言って来たので、ソ連軍の宿舎に行くと、写真を四枚くれた。それは私と通訳が二人で話をしている場面と、私が馬とともにいるところ、私一人がいるところ、能戸君と話をしているところの四枚であった。大尉は私の頭の上に手を置き笑って

いた。通訳と話を始めた。私もロシア語を少し覚えていたが、帰国のことのみ考えていたので、何を言っているかわからなかった。どんなに日本は変わっているだろう、そんなことが頭より離れなかった。

通訳が突然私の手を握り、大尉が元気で日本に帰れと言っている、将来また会うこともないだろうが、会う機会があつてほしいと通訳は私の手を強く握った。シベリア抑留の最後のときであった。捕虜になった思い出や、異国に眠った戦友に別れをする私の心は乱れた。二隻の輸送船が入った。高砂丸と恵山丸であった。船より三人の日本人がソ連軍将校宿舎に来た。通訳と話し始めて、輸送の役目を話した。私たちは恵山丸に乗船とぎまわり、日本人抑留者の責任者は能戸君にきまり、乗船することになった。

私は大尉と通訳に別れを告げ、戦友のいる宿舎に帰った。直ちに乗船となった。私達のタイセット地区の乗船が最初であり、他の地区の者も乗船した。船内の生活が始まる。まず船内の組織であった。能戸君が責任者であることが発表された。食事やその他のことをやる生活部

長に、私が能戸君より任命された。

船内は喜びの声であふれた。初めて見る海の色も鮮明で、シベリア抑留の辛苦も忘れ、甲板に出て労働歌をやっている粗もいた。夜は皆寝ることも忘れて話がはずんだ。私は能戸君に下船の準備等を、いろいろと話があり、寝ることもできなかった。

翌日夕方に海の彼方に日本の山々が見えはじめた。これを見て涙を流すほどの感で山々を見つめた。その夜は船内で寝ることになったが、だれもが粗をつくって話を一生懸命になってやっている姿が私の目に映った。翌朝舞鶴港に着き、下船となる。昭和二十四年八月三十日であった。

みな下船となった。最後に能戸君と私が下船すると、アメリカ軍のMPと日本の係官がきて、別室にて一人一人身体検査を受けた。私が持っていた写真四枚は日本人係官に取り上げられた。収容所の共産指導者であった筈であるという。帰還者が、君はよく通訳と仕事をして、収容所を回っているとのこと、また写真も持っているという、別室にて能戸君外五名の抑留者とともに、舞鶴

の宿舎で宿ることになった。翌日午後、私のところに故郷奈半利町の助役が身柄引受人として来たとのことにて、高知県人は私一人であった。私は共産主義者の名をうけ、奈半利町に帰ったのが昭和二十四年九月五日であった。

家に帰ると、父が出して見せたのは三菱重工業神戸造船所の手紙であった。出征前は技手補であったのが、昭和十九年十二月一日付をもって技手に発令されていた。これは、私が苦学により技術員教習所（神戸高等工業の先生による技術員養成の学校）を昭和十九年十一月三十日付で修了（証書あり）し、その学歴が加味されたためと思われるが、昭和二十四年八月二十日付で未復員のため退職とのことだった。

シベリア抑留のため、人生をこれによって新たな道を進むことになり、苦学をした。希望をもって生きる途中の青年が、農業をやることになり、現在に至る。

最後にシベリアにて亡くなった戦友のご冥福を心より祈ります。